道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信　第６号
令和７年11月28日(金)
発行者　校長　宮田　純生

当たり前は、当たり前じゃない

１学年職員

最近、プラネタリウムに行って改めて考えたことです。

この壮大な宇宙で、私たちが今ここに存在することは、まさに奇跡の連続です。私たちの体を形作る物質の起源は、遠い昔に命を終えた星々のカケラ。私たちは皆、星くずから生まれています。体内の細胞は何千何万ものチームワークで生命を保ち、大気の循環、生物の営み、すべてが複雑に絡み合い、この「今」という奇跡の一瞬を作り出しています。

宇宙のつながりと同じく、私たちの生活も多くの人々の関わりで成り立っています。人は出会いと関わりの中で成長し、その交流はエネルギーを生み出します。ときに意見がぶつかり合うことも、お互いを深く理解し、学び合うための大切なプロセスです。誰かの温かい言葉や行動に助けられ、元気をもらい、一歩踏み出す勇気をもらっています。家族、友人、仲間、そして先生方一身の周りの数えきれない人々の支えがあって、私たちは「今」を生きています。

元気に笑い合えること。先日の合唱祭のように、クラスで団結し、熱い気持ちで感動を分かち合えること。これらは本当に「当たり前」でしょうか？仲間と一つの目標に向かい、真剣な思いを伝え合った感動は、決して自動的に生まれるものではありません。皆さんが一人ひとり行動し、思いを込めたからこそ実現した、かけがえのない奇跡ではないでしょうか。

宇宙や生命の奇跡と同じく、人とのつながりも、私たちが生きる上で不可欠で大切なエネルギーです。この素晴らしい毎日をより豊かなものにするために、改めて周囲の人の思いを大切にし、自分にできるあたたかい言葉や行動を考えてみてください。

最後に、毎日明るい挨拶とたくさんの笑顔をくれる生徒の皆さん、日々サポートしてくださる職員の方々、そして私を受け入れてくれる友人や家族の支えに、心から感謝します。いつも私にエネルギーを送ってくれて、本当にありがとうございます！

毎日の小さな幸せについての話

２学年職員

「幸福とは今あるものに感謝できること。簡単なようで難しく、難しいようで簡単。」これはスラムダンクやバカボンドの作者である井上雄彦さんの言葉です。今あるものに感謝って何だろうと考えたとき、先日久しぶりに実家に帰ったときのことを思い出しました。

この前、家族を連れて実家に帰ったとき、久しぶりに母の作った卵焼きを食べました。思い出してみると母の作る卵焼きは自分が高校生になるころまで朝ごはんやお弁当に入っていたいわゆる「おふくろの味」というやつです。当時は当たり前に感じていましたが、久しぶりに食べた母の作る卵焼きはものすごくおいしく、懐かしさとともに幸せを感じた瞬間でした。こういった小さな幸せは、実は今もたくさん身の回りにあって、今回道徳通信を書きながら、改めて身の回りにある毎日の小さな幸せに感謝して生活をしようと思いました。第一歩として今日帰ったら、毎日おいしい料理を作ってくれる妻に、「ただいま」と言ったら「おかえり」と言ってくれる子どもたちに「ありがとう」を伝えようと思います。皆さんも当たり前になってしまっていて気づいていない身の回りの幸せに感謝してその気持ちを伝えてみてはいかがですか？

ピアノを弾くうえで大切にしていること

３学年職員

私は、音楽大学、大学院でピアノを学び、ソロだけでなくいろいろな演奏家とコンサートやコンクールといった舞台に立ちました。国内に限らず、国際コンクールにも挑戦し、同世代の演奏家と出会うことがありました。舞台上では、不安や緊張で押しつぶされそうになることも多々ありましたが、それ以上に本番まで「自分の音楽をどう表現するか」を熟考し続けた時間が、自分を大きく成長させてくれたと感じます。

ピアノを弾くうえで私が大切にしていることは、ただ正確に音を並べることではありません。もちろん練習を積み重ねて技術を磨くことは必要です。しかし、最も大切なことは「心を込めて音楽を伝える」ということです。ショパンやシューマンといった作曲家の作品には、それぞれの生きた人生や感情が楽譜に込められています。演奏家は、それを楽譜から読み取り、どのように自分の中で解釈し、聴衆に届けるか。私が演奏する上で一番大切にしているものです。

時に努力しても思うような演奏ができず、悔しい思いをすることもありました。コンクールでは、結果が出ず、落ち込んだこともありました。けれども、そうした経験を通して「失敗もまた大切な糧になる」と気づきました。うまくいかないときにこそ、自分の演奏を見つめなおし、次に向かって成長する機会だと思います。

これからも、作曲家が人生をかけてつくった作品と向き合い続けて弾いていきたいと思います。

上高地をめざして

アッピースマイルサポーター

今年は暑い夏でした。こんな時は是非涼しいところで過ごしてみたいと考え、上高地をめざし、出発しました。

上高地は長野県松本市にあり標高 1500mの山岳景勝地です。中部山岳国立公園の一部、国の文化財に指定されています。乗用車でいくと、上高地近くまでは車を乗り入れることはできないので手前の「あんだな駐車場」で上高地乗り入れ用のバスに乗り換える必要があります。バスに乗りかえて大正池停留場で降りて歩くことにしました。

大正池は大正４年焼岳の大噴火によって梓川がせきとめられてできた池、この暑い夏にもかかわらず冷たい青い水をたたえています。さらに、梓川を流れに沿って上流へと進んでいくと、勢いよく流れる川は雪どけ水を満々とたたえながら流れていくのです。そこに足をいれたら凍りそうで、一緒に流されてしまいそう。

目の前に広がる山々は 3000ｍ級。奥穂高岳 3190ｍ、前穂岳 3090ｍ明神岳主峰 2930ｍ山々には万年雪がまだ残っています。遊歩道を河童橋めざして歩いていると川沿いに石を投げる青年がいました。大きな塊の石を投げているので「平らな石の方が水切りにはむいているよ」と言うとお礼を言われましたが、言葉が「？」なので「チャイナ？」と聞くと「台湾」と日本語で言われ、周りを見たら友だちがたくさんいました。「円安とはいえ偉いもんだ、台湾から何円かかるのだろう」と思いました。

河童橋は大勢の人で賑わっており、河童橋は新しく丈夫なように造り換えられたのかと感じました。外国の人が多いように思われて思わず数えてしまったくらいです。

「なぜ河童橋というんだろう」「このへんに河童がいたんじゃない」という声がして、「そうかもしれない？ね。河童橋が上高地の中心か？」と、下をとうとうと流れる梓川の上流、下流を眺めながら思いました。